

大学院口腔科学教育部「ICTを活用した関連研究の発表支援」研究成果報告書

口腔科学教育部 口腔機能管理学分野 小林莉子

研究課題名 高齢者の咀嚼および嚥下機能と食品嗜好との関連性

1. 研究目的と成果内容

【目的】わが国の高齢化率は上昇を続けており、高齢者の健康寿命への関心も高い。特に食事は、楽しみの一つであり QOL の向上につながるため重要とされている。咀嚼や嚥下機能が低下すると摂取する食品が制限され、食品嗜好へ影響を与えることが考えられる。しかし、口腔機能と食品嗜好との関連に着目した研究はほとんどみられない。そこで本研究は、高齢者の咀嚼および嚥下機能と食品嗜好との関連性を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】対象は 65 歳以上の、徳島大学病院歯科衛生室の外来受診患者 40 名（以後、外来受診群）と、通所介護サービス利用者 20 名（以後、デイサービス群）とした。さらに、対照として徳島大学学生 25 名（以後、青年群）を対象に加えた。方法は、まず対象者の年齢、口腔内状況（現在歯数、義歯使用、咬合支持）を確認し、平井らの摂取可能食品質問票の食品 35 品目を用いて、食品嗜好スコア（好き/嫌い）、咀嚼スコア（噛める/噛めない）、嚥下スコア（飲み込める/飲み込めない）に関するアンケート調査を行い、口腔機能として咀嚼機能はガム咀嚼、前述の咀嚼スコア、嚥下機能は RSST、最大舌圧、水のみテスト、前述の嚥下スコアを評価し、解析 I を外来受診群とデイサービス群の比較、解析 II では両群を合算して高齢者群とし、高齢者群と青年群の口腔機能と食品嗜好の関連性の比較として、各パラメータにおける 2 群間比較、口腔機能と食品嗜好との相関関係を求め、さらに、食品嗜好スコアと年齢、口腔機能との間において、交絡要因の影響を排除するためにステップワイズ重回帰分散を行った。

【結果と考察】外来受診群およびデイサービス群はともに、RSST と食品嗜好スコアに有意な相関が認められた。また、デイサービス群のみに年齢、ガム咀嚼、嚥下スコアと食品嗜好スコアに有意な相関が認められた。多変量解析で食品嗜好スコアと相関関係が認められたのは、外来受診群が嚥下スコアと RSST、デイサービス群が RSST と咀嚼スコアであった。両群を合算した高齢者群ではガム咀嚼、咀嚼スコア、RSST、嚥下スコアと食品嗜好スコアが有意な相関が認められたが、青年群においては、いずれのパラメータにも食品嗜好スコアと相関は認められなかった。また多変量解析より、高齢者群のみに嚥下スコア、ガム咀嚼、RSST が食品嗜好スコアと相関関係が認められた。本研究の結果より、自立高齢者（外来受診群）および要介護高齢者（デイサービス群）は嚥下機能と食品嗜好に関連性があることが明らかになった。また、要介護高齢者の咀嚼機能と食

品嗜好においても関連性が認められた。さらに、高齢者の食品嗜好は年齢ではなく、咀嚼および嚥下機能が影響する可能性が考えられた。

【結論】以上より、高齢者の咀嚼および嚥下機能と食品嗜好には関連性があることが示唆された。

2. 自己評価

- ・研究の高齢対象者を40名、デイサービス利用者を25名に増やすことができた。
- ・第29回日本口腔リハビリテーション学会で口頭発表することができた。
- ・大学院口腔科学教育部の修士論文を作成することができた。
- ・大学院口腔科学教育部の修士課程研究発表会で発表することができた。
- ・今後、摂食リハビリテーション学会等の学会誌に投稿しようと考えている。

3. 学会発表

発表題目：高齢者の咀嚼，嚥下機能と食品嗜好との関連性 第2報外来患者とデイサービス利用者の比較

学会名：第29回日本口腔リハビリテーション学会学術大会

開催地：徳島

開催年月日：2015年11月14-15日

共著名：小林莉子，松山美和，梶原美恵子，渡辺朱里

発表方法：口頭発表